



TITLE:

REGGEとBARUCCHIのLandau曲線の研究について (「複素解析とその応用」研究会報告 2)

AUTHOR(S):

瀬藤, 憲昭

CITATION:

瀬藤, 憲昭. REGGEとBARUCCHIのLandau曲線の研究について (「複素解析とその応用」研究会報告 2). 数理解析研究所講究録 1966, 14: 1-21

ISSUE DATE:

1966-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/107416>

RIGHT:

REGGE と BARUCCHI の Landau 曲線の研究について

京大・物理 瀬 藤 憲 昭

- § 1. 序 論
- § 2. Cayley 行列式
- § 3. 箱型グラフの Landau 曲線
- § 4. 三段梯子グラフ
- § 5. N 段梯子グラフ
- § 6. クラス U
- § 7. クラス C

紹介する論文は

T. REGGE and G. BARUCCHI, On the Properties of Landau Curves, Nuovo Cimento **34** (1964), 106 である。

この論文では, 広い範囲の Feynman グラフの Landau 曲線について, 主にその代数幾何学的性質が調べられている。

§ 1. 序 説

一つの Feynman グラフの過程に対する確率振巾の特異点 (極とか分枝点とか) を見い出す一般論は, N. NAKANISHI¹⁾ と L. D. LANDAU²⁾ によつて独立に行なわれた。

NAKANISHI と LANDAU は共に Feynman パラメーターを用いたが, 前者は内部四元運動量について積分を行ない, 特異点の位置を外部四元運動量と Feynman パラメーターとを含む連立方程式の解として与えたが, 後者は積分を行なわず特異点の位置を内部, 外部四元運動量と Feynman パラメーターとを含む連立方程式の解として与えた。それは

$$\sum_{\text{vertex}} p_i = 0, \quad (1.1)$$

$$\sum_{\text{loop}} \alpha_i p_i = 0, \quad (1.2)$$

$$\alpha_i (p_i^2 - m_i^2) = 0 \quad (1.3)$$

である。これを Landau 方程式と呼ぶことにする。(1.1)は各頂点(vertex)における四元運動量の保存を表わし、(1.2)は NAKANISHI の方法では内部四元運動量について積分を行なった効果を示し、LANDAU の方法では被積分関数が内部四元運動量について極値をとることを示している。また(1.3)は Feynman パラメータ α_i について極値をとることを示している。

ここで扱うのは外部四元運動量が四個の場合に限る。この時確率振巾の独立変数は二個($\because 4 \times 4 - 10$ (非斉次 Lorentz 群のパラメータの数) $- 4$ (外部粒子は自由粒子) $= 2$)である。従つて Landau 方程式を解いて二個の独立変数で表わせればそれが Landau 曲線になっている。

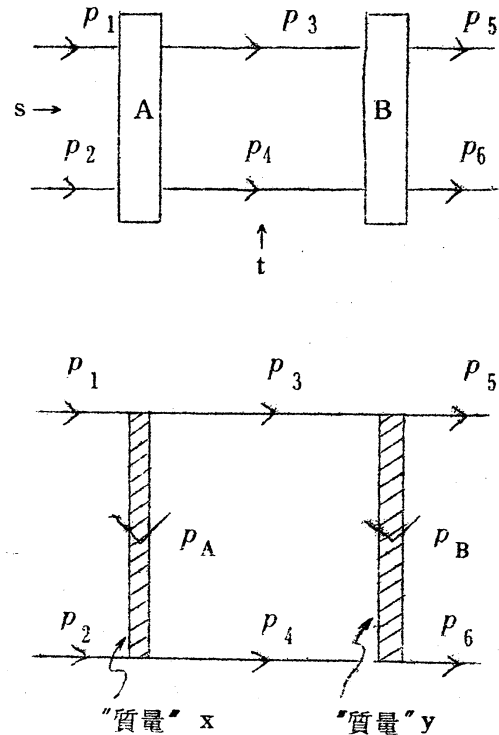
以下で用いる技術で重要なものは、BJORKEN³⁾ その他の人達が指適している Landau 方程式と電気回路についての Kirchhoff の法則との類似性を利用して、二つの Feynman グラフ A, B の Landau 曲線がわかっている時それらのグラフの“積”AB の Landau 曲線を求めるということである。つまり第1図上の独立変数として

$$s = (p_1 + p_2)^2 = (p_3 + p_4)^2 \\ = (p_5 + p_6)^2,$$

$$t = (p_1 - p_5)^2 = (p_2 - p_6)^2$$

をとり、箱 A を“電流” $p_A = p_1 - p_3$ 、箱 B を“電流” $p_B = p_3 - p_5$ が流れていると見なすと(第1図下)、このグラフに対する Landau 方程式は

$$\left. \begin{aligned} \alpha_A p_A + \alpha_B p_B + \alpha_3 p_3 + \alpha_4 p_4 \\ = 0, \\ p_A^2 = x, \\ p_B^2 = y \end{aligned} \right\} \quad (1.4)$$



第 1 図

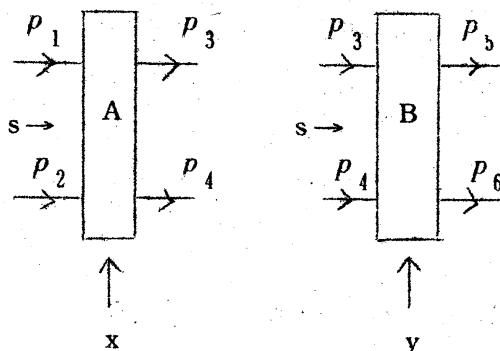
となる。四元ベクトル p_A, p_B, p_3, p_4 は一次独立ではないからその Gram 行列式は零である。これより

$$f_0(s, t, x, y) = 0 \quad (1.5)$$

を得る。一方 A, B 自身もグラフで

あるから、その Landau 曲線を

$$\left. \begin{aligned} f_A(s, x) &= 0, \\ f_B(s, y) &= 0 \end{aligned} \right\} \quad (1.6)$$



とすると、"積" AB (第1図上) の

Landau 曲線は、(1.5) と

(1.6) とより x と y を消去して

$$f_{AB}(s, t) = 0$$

第 2 図

となる。つまり A と B の Landau 曲線及び箱型グラフ (第1図下) の Landau 曲線 (1.5)

がわかっている時、"積" AB の Landau 曲線が求まったわけである。

§2. Cayley 行列式⁴⁾

以下の議論でもう一つ重要なのは、Gram 行列式を Cayley 行列式に変形することである。

つまり：

$$\begin{vmatrix} p_1^2 & (p_1 p_2) & \cdots & (p_1 p_N) \\ (p_2 p_1) & p_2^2 & \cdots & (p_2 p_N) \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ (p_N p_1) & (p_N p_2) & \cdots & p_N^2 \end{vmatrix} = \frac{1}{(-2)^N} \begin{vmatrix} 0 & 1 & 1 & \cdots & 1 & 1 \\ 1 & 0 & (p_1 - p_2)^2 & \cdots & (p_1 - p_N)^2 & p_1^2 \\ 1 & (p_2 - p_1)^2 & 0 & \cdots & (p_2 - p_N)^2 & p_2^2 \\ \vdots & \vdots & \vdots & \ddots & \vdots & \vdots \\ 1 & (p_N - p_1)^2 & (p_N - p_2)^2 & \cdots & 0 & p_N^2 \\ 1 & p_1^2 & p_2^2 & \cdots & p_N^2 & 0 \end{vmatrix} \quad (2.1)^{4)}$$

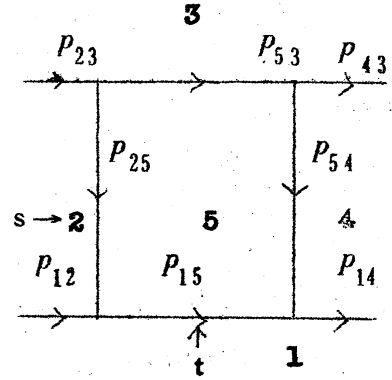
こゝで $N=4$ の場合を第3図の箱型グラフの Landau 曲線と関連づけて少し調べてみる。

第3図で四元運動量の名付け方は明らかであろう。そして、 $p_{ij} \equiv -p_{ji}$ と約束する。その時

(1.1) は例えば (235) 頂点に対して

$$p_{23} = p_{25} + p_{53}$$

となる。つまり二つの運動量の名前の足が内側で揃っていれば（上の右辺で5という数字），それらを加えると揃っていた足がなくなつて外側の足が生き残るというわけである。これは三つ以上の運動量についても拡張できる。そしてこれが矛盾なく行なわれる保証が（1.1）なのである。逆に



第 3 図

$$p_{12} + p_{23} \equiv p_{13} = p_{14} + p_{43}$$

$$p_{23} - p_{43} = p_{23} + p_{34} \equiv p_{24} = p_{14} - p_{12} = p_{21} + p_{14}$$

で p_{13} や p_{24} を定義して

$$s = p_{13}^2, \quad t = p_{24}^2 \quad (2.2)$$

とおくことができる。（1.3）は

$$\alpha_1(p_{15}^2 - m_{15}^2) = 0, \dots, \alpha_4(p_{45}^2 - m_{45}^2) = 0$$

であるが今 α_i ($i=1, \dots, 4$) がすべて零でない場合を考えると（他の場合の Landau 曲線はこの場合の Landau 曲線より求めることができる。例えばこの Landau 曲線の接線とか漸近線とか……）

$$p_{i5}^2 = m_{i5}^2, \quad i=1, \dots, 4 \quad (2.3)$$

となる。そして外部四元運動量は自由粒子が持っているものであるから

$$p_{12}^2 = M_{12}^2, \quad p_{23}^2 = M_{23}^2, \quad p_{34}^2 = M_{34}^2, \quad p_{41}^2 = M_{41}^2, \quad (2.4)$$

（小文字 m は内部質量，大文字 M は外部質量）最後に（1.2）は

$$\alpha_1 p_{15} + \alpha_2 p_{25} + \alpha_3 p_{35} + \alpha_4 p_{45} = 0$$

であり，これは p_{i5} ($i=1, \dots, 4$) の Gram 行列式が零であることと同値である。（勿論特異点は，physical sheet の上にあるもののみを捜しているわけではない。）そこで（2.1）（2.2）（2.3）（2.4）を考慮すると，

$$\begin{vmatrix} 0 & 1 & 1 & 1 & 1 & 1 \\ & 0 & (p_{15}-p_{25})^2 & (p_{15}-p_{35})^2 & (p_{15}-p_{45})^2 & p_{15}^2 \\ & & 0 & (p_{25}-p_{35})^2 & (p_{25}-p_{45})^2 & p_{25}^2 \\ & & & 0 & (p_{35}-p_{45})^2 & p_{35}^2 \\ & & & & 0 & p_{45}^2 \\ & & & & & 0 \end{vmatrix} =$$

対 称

$$= \begin{vmatrix} 0 & 1 & 1 & 1 & 1 & 1 \\ & 0 & p_{12}^2 & p_{13}^2 & p_{14}^2 & p_{15}^2 \\ & & 0 & p_{23}^2 & p_{24}^2 & p_{25}^2 \\ & & & 0 & p_{34}^2 & p_{35}^2 \\ \text{対} & & & & 0 & p_{45}^2 \\ \text{称} & & & & & 0 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} 0 & 1 & 1 & 1 & 1 & 1 \\ 1 & 0 & M_{12}^2 & s & M_{41}^2 & m_{15}^2 \\ 1 & M_{12}^2 & 0 & M_{23}^2 & \epsilon & m_{25}^2 \\ 1 & s & M_{23}^2 & 0 & M_{34}^2 & m_{35}^2 \\ 1 & M_{41}^2 & \epsilon & M_{34}^2 & 0 & m_{45}^2 \\ 1 & m_{15}^2 & m_{25}^2 & m_{35}^2 & m_{45}^2 & 0 \end{vmatrix} = 0 \quad (2.5)$$

これが第3図に対する(1.1)~(1.3)を解いて二つの独立変数 s, ϵ であらわしたもの、つまり第3図の Landau 曲線である。もとの Gram 行列式よりも 2 行 2 列増えているが、形はたいへん美しい。

一般の場合に戻つて(2.1)の右辺(より前の因子を除いたもの)を

$$\det | (s_{\alpha\beta}) | \equiv \begin{pmatrix} \\ \end{pmatrix} \quad (2.6)$$

とおく。 $(s_{\alpha\beta})$ は対称行列であり $s_{0\alpha} = 1 - \delta_{\alpha 0} = s_{\alpha 0}$, 他の $s_{\alpha\beta} = s_{\beta\alpha} = p_{\alpha\beta}^2$.
 $\begin{pmatrix} \\ \end{pmatrix}$ から α_1 行, ..., α_n 行, β_1 列, ..., β_n を消した余因子^{*}(algebraic minor)を
 $\begin{pmatrix} \alpha_1 \dots \alpha_n \\ \beta_1 \dots \beta_n \end{pmatrix}$

と書くことにする。これは α, s, β, s に関してそれぞれ反対称, 上と下との総入れ替えに対して対称である。また次の等式が成り立つ。⁴⁾

$$\begin{pmatrix} \alpha \\ \beta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} r \\ \delta \end{pmatrix} - \begin{pmatrix} \alpha \\ \delta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} r \\ \beta \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \alpha r \\ \beta \delta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \\ \end{pmatrix} \quad (L.1)$$

$$\begin{pmatrix} \alpha r \\ \beta \delta \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} \alpha \beta \\ \delta r \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} \alpha \delta \\ r \beta \end{pmatrix} = 0. \quad (L.2)$$

$$\sum_{\beta=1}^{N+1} \begin{pmatrix} \alpha \\ \beta \end{pmatrix} = \delta_{0\alpha} \begin{pmatrix} \\ \end{pmatrix}. \quad (L.3)$$

$$\det_{\alpha, \beta} \begin{pmatrix} \alpha \\ \beta \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \\ \end{pmatrix}^{N+1}. \quad (L.4)$$

$$\begin{pmatrix} \\ \end{pmatrix} \text{ は } s_{\alpha\beta} \text{ の二次式.} \quad (L.5)$$

$$\begin{pmatrix} \alpha \\ \beta \end{pmatrix} \text{は } s_{\alpha\beta} \text{ の一次式.} \quad (\text{L. 6})$$

$$\begin{pmatrix} \alpha \\ \alpha \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} \alpha \beta \\ \alpha \beta \end{pmatrix} \text{は } s_{\alpha\beta} \text{ に依らない.} \quad (\text{L. 7})$$

$$\frac{\partial}{\partial s_{\alpha\beta}} \begin{pmatrix} \alpha \\ \beta \end{pmatrix} = 2 \begin{pmatrix} \alpha \\ \beta \end{pmatrix}, \quad \frac{\partial^2}{\partial s_{\alpha\beta}^2} \begin{pmatrix} \alpha \\ \beta \end{pmatrix} = -2 \begin{pmatrix} \alpha \beta \\ \alpha \beta \end{pmatrix}, \quad \frac{\partial}{\partial s_{r\delta}} \begin{pmatrix} \alpha \\ \beta \end{pmatrix} =$$

$$\begin{pmatrix} \alpha r \\ \beta \delta \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} \alpha \delta \\ \beta r \end{pmatrix}. \quad (\text{L. 8})$$

$$s_{\alpha\beta} \text{ と } s_{\alpha r} \text{ についての } \begin{pmatrix} \alpha \\ \beta \end{pmatrix} \text{ の全次数は } 2. \quad (\text{L. 9})$$

$$\begin{pmatrix} \alpha \\ \beta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} r \delta \\ r \eta \end{pmatrix} - \begin{pmatrix} \delta \\ \eta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} r \alpha \\ r \beta \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} r \\ \beta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} r \delta \\ \alpha \eta \end{pmatrix} - \begin{pmatrix} r \\ \eta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} r \alpha \\ \delta \beta \end{pmatrix}. \quad (\text{L. 10})$$

尚このうち (L.1), (L.2), (L.4), (L.10) 任意の行列式に対して成り立つ。

§3 箱型グラフのLandau曲線

箱型グラフのLandau曲線, つまり (2.5) については, 既にたくさんの文献があるが^{5),6)}ここでは §2 で導入した記号を用いて簡単にふり返つてみる。議論を一般的にするため (2.6) の $\begin{pmatrix} \alpha \\ \beta \end{pmatrix} \equiv f(s, t) = 0$ の曲線を考え, 時々 $N=4$, つまり (2.5) (これを $f_2(s, t) = 0$ と書く) の場合に戻る。但しいずれの場合にも $s \equiv s_{13} \equiv p_{13}^2$, $t \equiv s_{24} \equiv p_{24}^2$ を変数, 他は定数とみなす。

$f(s, t)$ は s, t それぞれについて二次式でありしかも全次数は 4, つまり最高巾は

$$\begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 1 & 2 & 3 & 4 \end{pmatrix} s^2 t^2 + \dots \quad (3.1)$$

なる形である。 $N=4$ では

$$\begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 1 & 2 & 3 & 4 \end{pmatrix} = \begin{vmatrix} 0 & 1 \\ 1 & 0 \end{vmatrix} = -1.$$

$f(s, t)$ が (3.1) の形をしていることより, $f(s, t) = 0$ は二つの水平漸近線 ($t = \text{const.}$) と二つの垂直漸近線 ($s = \text{const.}$) を持つ。このことは, s, t 平面を複素射影平面と見なすと, 四次曲線 $f=0$ ($n=4$) が無限遠直線上に二つの節点 (node) を持つことを意味する ($\delta=2, \kappa=0$)。従つて Plücker 公式 (これについては後掲の中野茂先生の論文を見ら

れたい。)により $f=0$ は genus 1, class 8 である。genus が 1 であるからこの曲線
は楕円関数でパラメーター付けできる。水平漸近線は f を

$$f = A(t)s^2 + B(t)s + C(t)$$

と書くと $A(t)=0$ の解である。ところが (L. 8) により

$$A(t) = \frac{1}{2} \frac{\partial^2}{\partial s^2} \left(\begin{array}{c} 1 \\ 1 \end{array} \right) = \begin{pmatrix} 1 & 3 \\ 1 & 3 \end{pmatrix}. \quad (3.2)$$

$N=4$ の場合には

$$\begin{pmatrix} 1 & 3 \\ 1 & 3 \end{pmatrix} = \begin{vmatrix} 0 & 1 & 1 & 1 \\ 1 & 0 & t & m_{25}^2 \\ 1 & t & 0 & m_{45}^2 \\ 1 & m_{25}^2 & m_{45}^2 & 0 \end{vmatrix} = [t - (m_{25} + m_{45})^2] [t - (m_{25} - m_{45})^2] \quad (3.3)$$

であるから

$$t = (m_{25} \pm m_{45})^2 \quad (3.4)$$

が水平漸近線の方程式である。これは通常のしきい値 (normal threshold) で、第 3 図
の Landau 方程式で $\alpha_1 = \alpha_3 = 0$ の解である。同様にして垂直漸近線も求めることが出来、
 $N=4$ では $s = (m_{15} \pm m_{35})^2$ となり、これは $\alpha_2 = \alpha_4 = 0$ の解となつている。

異常しきい値 (anomalous threshold) は $f=0$ の水平接線と垂直接線になつている。

垂直接線は $f=0$ と $\partial f / \partial t = 0$, つまり

$$\begin{pmatrix} 2 \\ 4 \end{pmatrix} = 0, \quad \begin{pmatrix} 2 \\ 4 \end{pmatrix} = 0 \quad (3.5)$$

を s について解けばよい。ところが (L. 1) より

$$\begin{pmatrix} 2 \\ 4 \end{pmatrix}^2 = \begin{pmatrix} 2 \\ 2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 4 \\ 4 \end{pmatrix} \quad (3.6)$$

で、この右辺は t を含んでいないから (3.6) を解いて直接 $s = s_i$ ($i=1, \dots, 4$) が得られ
これが垂直接線の方程式である。同様にして $\begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix} = 0$ と $\begin{pmatrix} 3 \\ 3 \end{pmatrix} = 0$ の解 $t = t_i$ ($i=1, \dots, 4$)
が水平接線である。尚、このことから $f=0$ の class が計算できる。つまり $t = \infty$ から、
この曲線に引いた接線の数に垂直接線が四個と、垂直漸近線が二個、但し、後者の“接点”は今接

線を引いている点 ($t=\infty$) であるから二度数えて $4+2 \times 2=8$ 。N=4 では、例えば

$$\begin{pmatrix} 2 \\ 2 \end{pmatrix} = \begin{vmatrix} 0 & 1 & 1 & 1 & 1 \\ 1 & 0 & s & M_{41}^2 & m_{15}^2 \\ 1 & s & 0 & M_{34}^2 & m_{35}^2 \\ 1 & M_{41}^2 & M_{34}^2 & 0 & m_{45}^2 \\ 1 & m_{15}^2 & m_{35}^2 & m_{45}^2 & 0 \end{vmatrix} = 0 \quad (3.7)$$

より

$$s = \left\{ (M_{41}^2 + m_{35}^2 - M_{34}^2 - m_{15}^2)^2 - \lambda(m_{45}^2, M_{41}^2, m_{15}^2) - \lambda(m_{45}^2, M_{34}^2, m_{35}^2) \right. \\ \left. \pm 2 [\lambda(m_{45}^2, M_{41}^2, m_{15}^2) \cdot \lambda(m_{45}^2, M_{34}^2, m_{35}^2)]^{1/2} \right\} / 4m_{45}^2,$$

$$\text{但し } \lambda(a, b, c) = a^2 + b^2 + c^2 - 2bc - 2ca - 2ab$$

となる。これは第3図の Landau 方程式で $\omega_2=0$ の解である。

$f=0$ は genus 1 であるからこの曲線上の唯一の Abel 積分は

$$\int^s \frac{g(s, t)}{\partial f / \partial t} ds$$

の形をした楕円積分である。(後掲論文参照) $g=0$ は次数 $4-3=1$ の node を通る共役曲線 (adjoint curve) であり、今は無限遠線上に node があるから g は定数 (s と t に依らない), 従つて上の積分は

$$\int^s \frac{ds}{\partial f / \partial t} \quad (3.8)$$

となる。 $\partial f / \partial t$ は $f=0$ の上での値であるから (3.6) より

$$\frac{\partial f}{\partial t} = \begin{pmatrix} 2 \\ 4 \end{pmatrix} = \left[\begin{pmatrix} 2 \\ 2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 4 \\ 4 \end{pmatrix} \right]^{1/2}.$$

$\begin{pmatrix} 2 \\ 2 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 4 \\ 4 \end{pmatrix}$ は s の二次式故 (3.8) は第一種楕円積分である。また同じ積分が (genus 1)

$$\int^t \frac{dt}{\sqrt{\begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 3 \\ 3 \end{pmatrix}}} \quad (3.9)$$

とも表わせる。これより $s_i (i=1, \dots, 4)$ のうち二つが一致すれば,

$t_i (i=1, \dots, 4)$ のうち二つも一致することがわかる。

今, 実際にこの一致が起つたとしよう。この時 $f=0$ は有限点で node を持ちその座標は一致した根 s_i, t_i である。勿論 node は $f=0$ の上にあるから $f(s_i, t_i)=0$ 。 s の二次式 $\begin{pmatrix} 2 \\ 2 \end{pmatrix}$

と $\begin{pmatrix} 4 \\ 4 \end{pmatrix}$ の判別式はそれぞれ $\begin{pmatrix} 2 & 1 \\ 2 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 2 & 3 \\ 2 & 3 \end{pmatrix}$ 及び $\begin{pmatrix} 4 & 1 \\ 4 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 4 & 3 \\ 4 & 3 \end{pmatrix}$ であり, t の二次式 $\begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 3 \\ 3 \end{pmatrix}$ の判

別式はそれぞれ $\begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 1 & 2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 4 \\ 1 & 4 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 3 & 2 \\ 3 & 2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 3 & 4 \\ 3 & 4 \end{pmatrix}$ でありそれらの積は積は等しいから, $\begin{pmatrix} 2 \\ 2 \end{pmatrix}=0$

又は $\begin{pmatrix} 4 \\ 4 \end{pmatrix}=0$ が重根をもつ時, そしてその時にのみ $\begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}=0$ 又は $\begin{pmatrix} 3 \\ 3 \end{pmatrix}=0$ が重根をもつ。

従つて $\begin{pmatrix} 2 \\ 2 \end{pmatrix}=0$ と $\begin{pmatrix} 4 \\ 4 \end{pmatrix}=0$ が共通根を持てば $\begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}=0$ と $\begin{pmatrix} 3 \\ 3 \end{pmatrix}=0$ が共通根を持ち, その逆も成

立する。つまり $\begin{pmatrix} 2 \\ 2 \end{pmatrix}$ と $\begin{pmatrix} 4 \\ 4 \end{pmatrix}$ とから s を消去した終結式と $\begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}$ と $\begin{pmatrix} 3 \\ 3 \end{pmatrix}$ から t に消した終結式とは

等しいことがわかつた。上に述べたことをもつと一般的に言つて:

T. 1 変数 $s_{\gamma\delta}$ についての $\begin{pmatrix} \alpha \\ \alpha \end{pmatrix}$ と $\begin{pmatrix} \beta \\ \beta \end{pmatrix}$ との終結式は, 変数 $s_{\alpha\beta}$ についての $\begin{pmatrix} \gamma \\ \gamma \end{pmatrix}$ と $\begin{pmatrix} \delta \\ \delta \end{pmatrix}$ との終結式に等しい。

T. 2 $\begin{pmatrix} \alpha \\ \alpha \end{pmatrix}=0$ と $\begin{pmatrix} \beta \\ \beta \end{pmatrix}=0$ の $s_{\gamma\delta}$ についての共通根が存在するとしてそれを s_1 とし,

$\begin{pmatrix} \gamma \\ \gamma \end{pmatrix}=0$ と $\begin{pmatrix} \delta \\ \delta \end{pmatrix}=0$ の $s_{\alpha\beta}$ についての共通根を t_1 とする。T. 1 によつて t_1 は存在する。

この時 $s_{\gamma\delta}=s_1, s_{\alpha\beta}=t_1$ において $\begin{pmatrix} \quad \\ \quad \end{pmatrix}=0$ である。

$N=4$ で上の定理を調べてみる。 $\begin{pmatrix} 2 \\ 2 \end{pmatrix}=0$ が重根を持つのは

$$[M_{41}^2 - (m_{15} + m_{45})^2][M_{41}^2 - (m_{15} - m_{45})^2][M_{34}^2 - (m_{35} + m_{45})^2][M_{34}^2 - (m_{35} - m_{45})^2] = 0$$

の場合で質量零の粒子を考えない限り, あまり現実的ではないが, $\begin{pmatrix} 2 \\ 2 \end{pmatrix}=0$ と $\begin{pmatrix} 4 \\ 4 \end{pmatrix}=0$ とが共通根

を持つのは例えば $M_{12}=M_{41}, M_{23}=M_{34}, m_{25}=m_{45}$, つまり弾性散乱で交換される二つの

粒子の質量が等しい時起る。今質量間にある関係が存在して $\begin{pmatrix} 2 \\ 2 \end{pmatrix}=0$ と $\begin{pmatrix} 4 \\ 4 \end{pmatrix}=0$ とが共通根

$s=s_1$ を持つたとしよう。T. 2 より $\begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}(t_1)=0, \begin{pmatrix} 3 \\ 3 \end{pmatrix}(t_1)=0$ を満たす t_1 が存在し,

$\begin{pmatrix} \quad \\ \quad \end{pmatrix}(s_1, t_1)=0$ である。この時 $\begin{pmatrix} 5 \\ 5 \end{pmatrix}(s_1, t_1)=0$ も成り立つ。実際 (L.1)(L.3)

により

$$\sum_{\alpha=1}^4 \binom{5}{\alpha} (s_1, t_1) = \binom{\alpha}{\alpha} \binom{5}{5} (s_1, t_1) = 0, \quad \alpha=1, \dots, 4,$$

$$\sum_{\alpha=1}^4 \binom{5}{\alpha} (s_1, t_1) + \binom{5}{5} (s_1, t_1) = \binom{5}{5} (s_1, t_1) = 0.$$

従つて共通根 (s_1, t_1) は $\binom{5}{5} = 0$ の上にある。

$$\binom{5}{5} = \begin{vmatrix} 0 & 1 & 1 & 1 & 1 \\ 1 & 0 & M_{12}^2 & s & M_{41}^2 \\ 1 & M_{12}^2 & 0 & M_{23}^2 & t \\ 1 & s & M_{23}^2 & 0 & M_{34}^2 \\ 1 & M_{41}^2 & t & M_{34}^2 & 0 \end{vmatrix} \equiv k(s, t)$$

であるからこの曲線は内部質量に依らず，考えている過程（第3図）の外状力学（kinematics）で定まる。実はこの曲線は KIBBLE⁷⁾ が調べた物理的領域の境界線なのである。 $k(s, t) = 0$ を Kibble 曲線と呼ぶ。node (s_1, t_1) では $\partial f_2 / \partial s = 0 = \partial f_2 / \partial t$ だから， f_2 と k との Jacobi 行列式 $J(f_2, k)$ は零である。ところがこの性質はもつと広く， $f_2 = 0$ が node を持つていなくても $f_2 = 0$ と $k = 0$ との交点で成り立つ。なぜなら（L.10）より

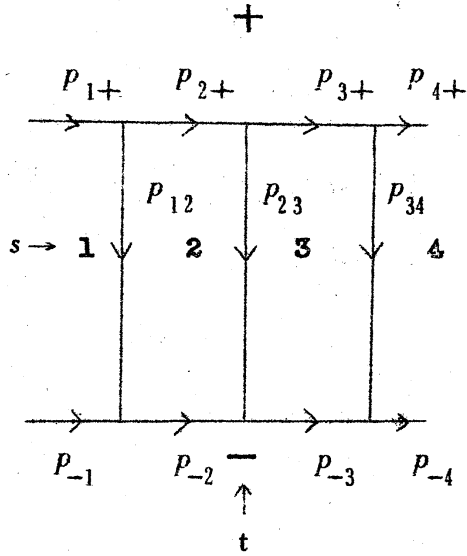
$$\frac{J}{4} = \binom{1}{3} \binom{5}{5} \binom{2}{4} - \binom{2}{4} \binom{5}{5} \binom{1}{3} = \binom{5}{3} \binom{5}{1} \binom{2}{4} - \binom{5}{4} \binom{5}{2} \binom{1}{3} = 0.$$

§4. 三段梯子グラフ

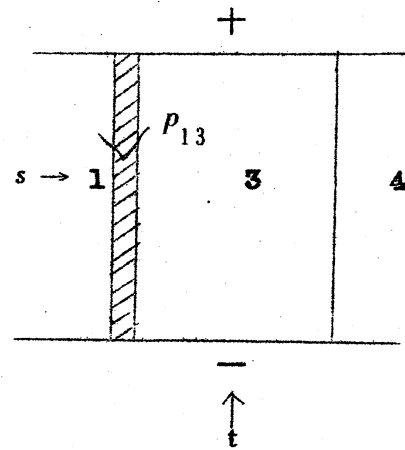
これは第4図のことである。運動量の名付けが以前と少し異なっており

$$s = (p_{1+} + p_{-1})^2 = p_{+-}^2, \quad t = (p_{1+} - p_{4+})^2 = p_{14}^2 \quad \text{である。}$$

このグラフの Landau 曲線を §1 で述べた，グラフの“積”の考えを用いて求める。まず第4図を第5図と第6図の“積”と見なす。（第5図で2の箱をつぶしそれを第6図で元へ戻す。）これらは箱型グラフであるからその Landau 曲線は前節で求めてあり，それぞれ



第 4 図



第 5 図

$$\left. \begin{aligned} g(s, t, x) &= 0, \\ h(s, x) &= 0 \end{aligned} \right\} \quad x \equiv p_{13}^2 \quad (4.1)$$

とする。(4.1)から x を消去して

$$f_3(s, t) = 0. \quad (4.2)$$

これが第4図のLandau曲線である。ところが
もう一つ方法がある。**3**の箱をつぶして再び元へ
戻す方法である。この時

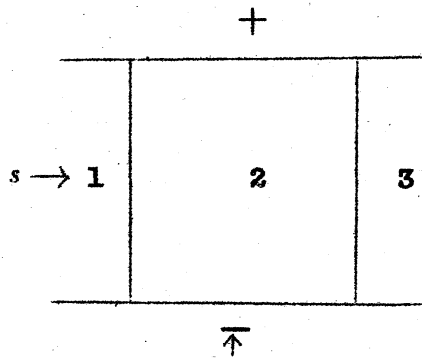
$$\left. \begin{aligned} g'(s, t, y) &= 0, \\ h'(s, y) &= 0, \end{aligned} \right\} \quad y \equiv p_{24}^2 \quad (4.3)$$

から y を消して

$$f'_3(s, t) = 0. \quad (4.4)$$

(4.2)も(4.4)も s, t 平面の代数曲線である。

これらが一致しなければ第4図のLandau曲線は
可約になってしまう。実は前節T.1によりこれらは
一致する。なぜなら：



第 6 図

$$\begin{array}{c}
+ \quad - \quad 1 \quad 2 \quad 3 \quad 4 \\
\left(\begin{array}{c} \\ \\ \\ \\ \\ \\ \end{array} \right) \equiv + \begin{array}{c} 0 \quad 1 \quad 1 \quad 1 \quad 1 \quad 1 \quad 1 \\ 1 \quad 0 \quad s \quad M_{+1}^2 \quad m_{+2}^2 \quad m_{+3}^2 \quad M_{+4}^2 \\ -1 \quad \quad 0 \quad M_{-1}^2 \quad m_{-2}^2 \quad m_{-3}^2 \quad M_{-4}^2 \\ 1 \quad 1 \quad \quad 0 \quad m_{12}^2 \quad x \quad t \\ 2 \quad 1 \quad \text{対 称} \quad \quad 0 \quad m_{23}^2 \quad y \\ 3 \quad 1 \quad \quad \quad \quad 0 \quad m_{34}^2 \\ 4 \quad 1 \quad \quad \quad \quad \quad 0 \end{array} \end{array} \quad (4.5)$$

とおくと、前節より

$$g = \begin{pmatrix} 2 \\ 2 \end{pmatrix}, \quad h = \begin{pmatrix} 4 \\ 4 \end{pmatrix}, \quad g' = \begin{pmatrix} 3 \\ 3 \end{pmatrix}, \quad h' = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}. \quad (4.6)$$

f_3 は $\begin{pmatrix} 2 \\ 2 \end{pmatrix}$ と $\begin{pmatrix} 4 \\ 4 \end{pmatrix}$ の $s_{13} \equiv x$ についての終結式であり、 f'_3 は $\begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}$ と $\begin{pmatrix} 3 \\ 3 \end{pmatrix}$ の $s_{24} \equiv y$ についての終結式である。従つてそれらは一致する。またこの時 T. 2 により (4.5) の $\left(\begin{array}{c} \\ \\ \\ \\ \\ \\ \end{array} \right) = 0$ である。

原論文ではこの三段梯子の Landau 曲線について詳しく議論せず、次節で N 段梯子の Landau 曲線についての一般論を詳しく行なつてゐる。しかしこの紹介ではその一般論を三段梯子にあてはめて述べ、一般論はその結果だけを書くことにする。おそらくこれは原著者に対する犯罪的行為であらう。

まず $f_3(s, t) = 0$ の漸近線を求める。

$$h(s, x) = Q_2(s)x^2 + (x \text{ の一次式}),$$

$$g(s, t, x) = B_0(s)x^2 + B_1(s, t)x + B_2(s, t)$$

と表わすと Q_2, B_0, B_1, B_2 は s について二次、 B_1 は t について 1 次、 B_2 は t について二次であり

$$B_2(s, t) = Q_3(s)t^2 + (t \text{ の一次式})$$

と書くと Q_3 は s の二次式である。これより f_3 は t の四次式、 s の八次式、全次数は 12、そして

$$f_3(s, t) = (Q_2(s)Q_3(s)^2)t^4 + (t \text{ の三次式}) \quad (4.7)$$

なる形をしていることがわかる。 $f_3=0$ の漸近線はすべて垂直($s=\text{const.}$)又は水平($t=\text{const.}$)であり水平漸近線は四個、垂直なのは四個あつてこれは二重に縮退している。

垂直漸近線は $Q_2(s) \cdot Q_3(s) = 0$ の解であるから

$$s = (m_{+2} \pm m_{-2})^2, (m_{+3} \pm m_{-3})^2.$$

水平漸近線はまず $h(s, x) = 0$ より

$$\lim_{s \rightarrow \infty} x(s) = (m_{12} \pm m_{23})^2,$$

次に $g(s, t, x(s)) = 0$ より

$$\lim_{s \rightarrow \infty} t(s) = \lim_{s \rightarrow \infty} (m_{34} \pm \sqrt{x(s)})^2 = (m_{12} \pm m_{23} \pm m_{34})^2.$$

以上まとめて垂直及び水平漸近線は

$$\left. \begin{aligned} s &= (m_{+2} \pm m_{-2})^2, (m_{+3} \pm m_{-3})^2 \\ t &= (m_{12} \pm m_{23} \pm m_{34})^2 \end{aligned} \right\} \quad (4.8)$$

但し符号のどちらを取るかは、選んでいる枝に依る。また一般にはこれらの漸近線は cusp 状でないことも示せる。

次に $f_3=0$ の垂直接線を求め、これによつてこの曲線の genus を計算する。垂直接線は $f_3=0$ より $t=t(s)$ と解いて $dt(s)/ds=\infty$ の s の値であるが f_3 は h と g とから x を消去したものであるから

$$\frac{dt}{ds} = \left[\frac{\partial g}{\partial t} \quad \frac{\partial h}{\partial x} \right]^{-1} \left[\frac{\partial g}{\partial x} \quad \frac{\partial h}{\partial s} - \frac{\partial g}{\partial s} \quad \frac{\partial h}{\partial x} \right] \quad (4.9)$$

が成り立ち、この分子は t と s が有限なら常に有限である。従つて垂直接線は

$$\frac{\partial g}{\partial t} \cdot \frac{\partial h}{\partial x} = 0$$

の解に限られる。二つの場合に分け、まず

$$A) \quad \partial h / \partial x = 0$$

これは $h \equiv \begin{pmatrix} 4 \\ 4 \end{pmatrix} = 0$ が $x \equiv s_{13}$ について重根をもつことであるから

$$M_1 \cdot M_2 = 0, \quad M_1 \equiv \begin{pmatrix} 3 & 4 \\ 3 & 4 \end{pmatrix}, \quad M_2 \equiv \begin{pmatrix} 1 & 4 \\ 1 & 4 \end{pmatrix} \quad (4.10)$$

と同値である。この場合(4.9)より $(\partial g / \partial x)(\partial h / \partial s) \neq 0$ を要求しなければならない。

$\partial h / \partial s \neq 0$ は $h=0$ が node を持っていないということでありこれは前節で見た通り一般

には成り立っている。また $\partial g / \partial x = 0$ は

$$M_3 \cdot P = 0, \quad M_3 \equiv \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 1 & 2 \end{pmatrix}, \quad P \equiv \begin{pmatrix} 3 & 2 \\ 3 & 2 \end{pmatrix} \quad (4.11)$$

を意味し、 M_3 は s のみの二次式で $M_{\pm 4}$ に依っているから $M_3 = 0$ の根は $M_{\pm 4}$ に依り一方 (4.10) の解は $M_{\pm 4}$ に依らない。従つて一般には $\partial h / \partial x = 0$ の時 $M_3 \neq 0$ である。同様の議論は $P = 0$ についても成り立つ。

従つて一般には (4.10) の根はすべて $f_3 = 0$ の垂直接線である。(この A) の議論が一般論と本質的に異なる唯一の個所である。)

$$B) \quad \partial g / \partial t = 0$$

これは

$$M_3 \cdot Q = 0, \quad Q = \begin{pmatrix} 2 & 4 \\ 2 & 4 \end{pmatrix} \quad (4.12)$$

と同値である。A) と同様に、一般には $M_3 = 0$ は $f_3 = 0$ の垂直接線になつている。ところが $Q = 0$ は $h = 0$ の Kibble 曲線であるから前節終りの議論と同じく $Q = 0$ と $h = 0$ の交点では

$$\frac{\partial(Q, h)}{\partial(s, x)} = 0,$$

また $Q = 0$ は s, x について $g = 0$ の Kibble 曲線であるから $Q = 0, g = 0$ なら

$$\frac{\partial(Q, g)}{\partial(s, x)} = 0,$$

従つて

$$\frac{\partial(g, h)}{\partial(s, x)} = 0$$

となりこれは (4.9) の右辺の分子が零ということである。故に B) の場合は $M_3 = 0$ のみが垂直接線となりうる。

まとめると、 $f_3 = 0$ の垂直接線は

$$\left. \begin{aligned} M_1 \cdot M_2 \cdot M_3 &= 0, \\ M_1 &= \begin{pmatrix} 3 & 4 \\ 3 & 4 \end{pmatrix}, \quad M_2 = \begin{pmatrix} 1 & 4 \\ 1 & 4 \end{pmatrix}, \quad M_3 = \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 1 & 2 \end{pmatrix} \end{aligned} \right\} \quad (4.13)$$

で与えられる。垂直接線は六本あることがわかったがその多重度は？ 今 $M_3=0$ の根の一つを s_0 とすを $h(s_0, x)=0$ より $x=x_1(s_0), x_2(s_0)$ と二根得られ、
 $g(s_0, t, x_i(s_0))=0, i=1, 2$ を t について解くと二重根が二つ得られることになる。他の場合も同様で結局 (4.13) の垂直接線は二度接する。

$f_3=0$ より t を s の関数として求めると、その $t(s)$ は (4.13) の s で分枝特異性 (branching singularity) をもつ。ある特定の枝 $t_1(s)$ から出発して複素 s 平面で s が適当な分枝特異点のまわりを一周すると他の枝 $t_2(s)$ に移ることができるから f_3 は既約である。そこで $f_3=0$ の class と genus を数える。§2 と同じ要領で $t=\infty$ からの接線の数に重複度を入れて $6 \times 2 + 4 \times 2 \times 2 = 28$ ($m=28$)、次数は 12 ($n=12$) で、一般には cusp はないから ($k=0$) genus

p は公式

$$p = \frac{m}{2} - n + \frac{k}{2} + 1 \quad (4.14)$$

に代入して、 $p=3$ 。従つて一般には $f_3=0$ は初等関数や楕円関数でパラメーター付けできない。“一般には” という但し書きは $f_3=0$ に対しては genus 3 が最大値であり、質量の間に特別な関係があると (弾性散乱とか同粒子交換とか……) 曲線の特異性が増えて、その分だけ genus は減ることになる。

§5. N 段梯子グラフ

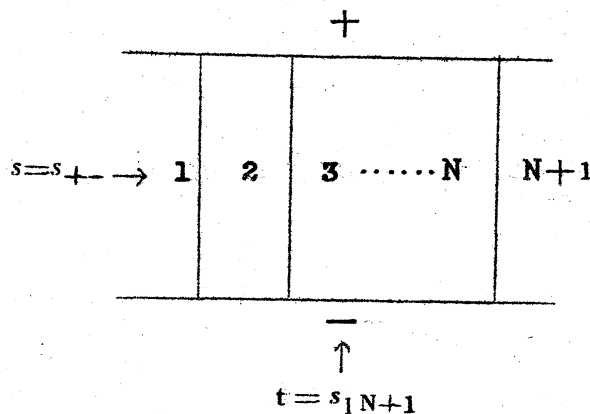
第7図のグラフの

Landau 曲線を考える。

$N=2$ は §3 で、 $N=3$ は

§4 で扱った。(4.5) の

拡張として

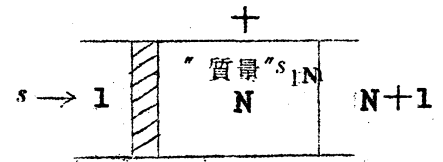


第 7 図

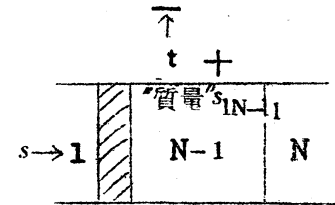
$$\begin{pmatrix} \end{pmatrix} = \begin{array}{c|cccccccccc}
& + - & 1 & 2 & \cdots & \ell-1 & \ell & \ell+1 & N & N+1 \\
\hline
0 & 1 & 1 & 1 & \cdots & 1 & 1 & 1 & 1 & 1 \\
+ & 1 & 0 & s & M_{+1}^2 & m_{+2}^2 & \cdots & m_{+\ell-1}^2 & m_{+\ell}^2 & m_{+N}^2 & M_{+N+1} \\
- & 1 & 0 & M_{-1}^2 & m_{-2}^2 & \cdots & m_{-\ell-1}^2 & m_{-\ell}^2 & m_{-\ell-1}^2 & m_{-N}^2 & M_{-N+1} \\
1 & 1 & & 0 & m_{12}^2 & \cdots & s_{1\ell-1} & s_{1\ell} & s_{1\ell+1} & s_{1N} & t \\
2 & 1 & & & 0 & \cdots & s_{2\ell-1} & s_{2\ell} & s_{2\ell+1} & s_{2N} & s_{2N+1} \\
\vdots & \vdots & & & & & & & & & \vdots \\
\vdots & \vdots & & & & & & & & & \vdots \\
\vdots & \vdots & & & & & & & & & \vdots \\
\ell-1 & 1 & & & & 0 & m_{\ell-1\ell}^2 & s_{\ell-1\ell} & \cdots & s_{\ell-1N} & s_{\ell-1N+1} \\
\ell & 1 & & & & & 0 & m_{\ell\ell+1}^2 & \cdots & s_{\ell N} & s_{\ell N+1} \\
\ell+1 & 1 & & \text{対 称} & & & & 0 & & s_{\ell+1N} & s_{\ell+1N+1} \\
\vdots & \vdots & & & & & & & & \vdots & \vdots \\
\vdots & \vdots & & & & & & & & \vdots & \vdots \\
N & 1 & & & & & & & & 0 & m_{NN+1}^2 \\
N+1 & 1 & & & & & & & & & 0
\end{array} \quad (5.1)$$

箱をつぶして元へ戻す操作として例えば

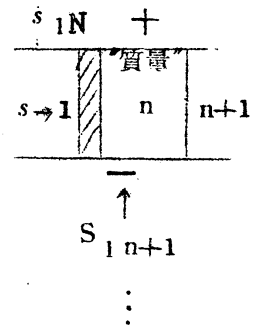
$$\begin{pmatrix} 2 & \cdots & N-1 \\ 2 & \cdots & N-1 \end{pmatrix} \equiv h(1, N, N+1) = 0;$$



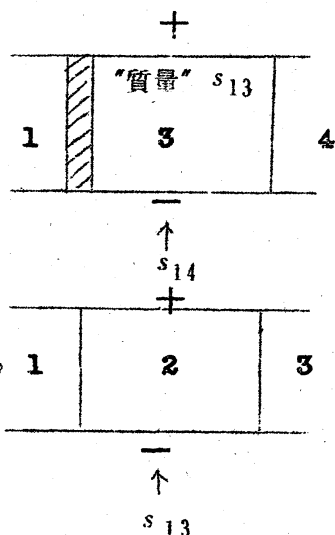
$$\begin{pmatrix} 2 & \cdots & N-2 & N+1 \\ 2 & \cdots & N-2 & N+1 \end{pmatrix} \equiv h(1, N-1, N) = 0;$$



$$\begin{pmatrix} 2 & \cdots & n-1 & n+2 & \cdots & N+1 \\ 2 & \cdots & n-1 & n+2 & \cdots & N+1 \end{pmatrix} \equiv h(1, n, n+1) = 0;$$



$$\begin{pmatrix} 2 & 5 & \cdots & N+1 \\ 2 & 5 & \cdots & N+1 \end{pmatrix} \equiv h(1, 3, 4) = 0; \quad s \rightarrow 1$$



$$\begin{pmatrix} 4 & \cdots & N+1 \\ 4 & \cdots & N+1 \end{pmatrix} \equiv h(1, 2, 3) = 0; \quad s \rightarrow 1$$

を考える。 $s_{1p} = t_{p-1}$ とおくと、これらは $N-1$ 個の連立方程式

$$h(1, 2, 3)(s, t_2) = 0,$$

$$h(1, 3, 4)(s, t_3, t_2) = 0$$

\vdots

$$h(1, n, n+1)(s, t_n, t_{n-1}) = 0,$$

\vdots

$$h(1, N-1, N)(s, t_{N-1}, t_{N-2}) = 0,$$

$$h(1, N, N+1)(s, t, t_{N-1}) = 0$$

(5.2)

を与える。今 x の多項式 f と g との x についての終結式を $f[x]g$ と書くことにすると

$$f_N(s, t) \equiv h(1, N, N+1)[t_{N-1}](h(1, N-1, N)[t_{N-2}] \cdots$$

$$([t_n]h(1, n, n+1)[t_{n-1}](\cdots [t_3](h(1, 3, 4)[t_2]h(1, 2, 3)) \cdots) \cdots)$$

(5.3)

が求める Landau 曲線である。前節と同様他の操作でも、得られる方程式は同じである。また $[\]$ の操作は結合律を満たすから (5.3) は括弧をはずしても意味がある。

(4.7) の拡張としては

$$f_N(s, t) = (Q_2(s) \cdots Q_N(s))^{2^{N-2}} \cdot t^{2^{N-1}} + \cdots, \quad (5.4)$$

但し

$$Q_p(s) \equiv \begin{pmatrix} 1 & \cdots & p-1 & p+1 & \cdots & N+1 \\ 1 & \cdots & p-1 & p+1 & \cdots & N+1 \end{pmatrix} = \begin{vmatrix} 0 & 1 & 1 & 1 \\ 1 & 0 & s & m_{+p}^2 \\ 1 & s & 0 & m_{-p}^2 \\ 1 & m_{+p}^2 & m_{-p}^2 & 0 \end{vmatrix}. \quad (5.5)$$

これより

- 1) f_N は s について $(N-1)2^N$ 次, t について 2^{N-1} 次, 全次数 $n = N2^{N-1}$.
 - 2) $f_N = 0$ は 2^{N-1} 個の水平漸近線を持つ。また垂直漸近線は $2(N-1)$ 個あり, 各々 2^{N-2} 重に縮退している。
- (4.8) の拡張としてそれらの漸近線は

$$\left. \begin{aligned} s &= (m_{+p} \pm m_{-p})^2, \quad p=2, \dots, N \\ t &= \left(\sum_{n=1}^N \pm m_{n, n+1} \right)^2 \end{aligned} \right\} \quad (5.6)$$

で与えられる。これらは一般には cusp ではない。

次に, $f_N = 0$ の垂直接線は (4.13) の拡張として

$$M_p = \begin{pmatrix} 1 & \cdots & p-1 & p+2 & \cdots & N+1 \\ 1 & \cdots & p-1 & p+2 & \cdots & N+1 \end{pmatrix} = 0, \quad p=1, \dots, N$$

となる。 $2N$ 個あり各々が 2^{N-2} 回接している。前節と同様 f_N は一般には既約である。この曲線の class m は

$$m = 2N \cdot 2^{N-2} + 2 \cdot 2(N-1) \cdot 2^{N-2} = (3N-2) \cdot 2^{N-1} \quad (5.7)$$

一般には cusp はないから, (4.14) より genus p がわかり

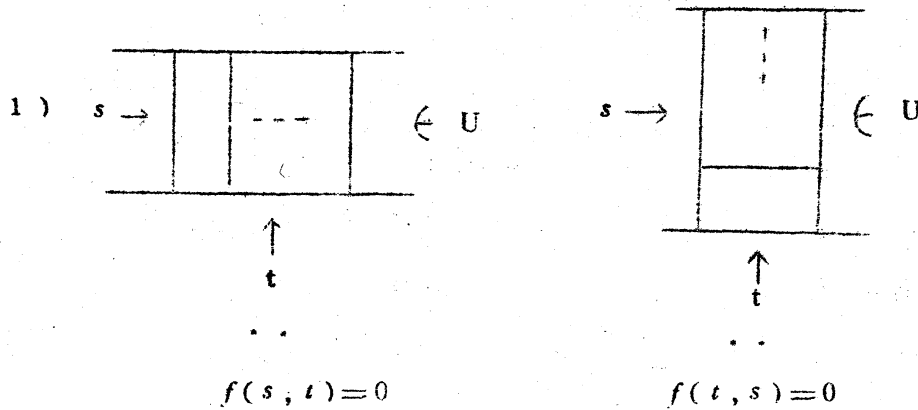
$$p = (N-2)2^{N-2} + 1. \quad (5.8)$$

| N | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | |
|---|---|---|---|----|----|-------|
| P | 1 | 3 | 9 | 25 | 65 | |

前節でも述べた如く, これは最大値を与えていると見なすべきである。

§ 6. クラス U

ここでは交叉していない (uncrossed) グラフのクラス U の Landau 曲線について或る程度一般論を行なう。但しこみ入った議論は省略致します。クラス U とその Landau 曲線は次の如く帰納的に定義される。



2) $F_1 \in U, F_2 \in U$ ならその "積" $F_1 F_2 \in U$. $f_1(s, t) = 0, f_2(s, t) = 0$ をそれぞれ F_1, F_2 の Landau 曲線とすると $F_1 F_2$ の Landau 曲線 $f = 0$ は,

$$f(s, t) = f_1(s, x)[x] f_0(s, t, x, y)[y] f_2(s, y) \quad (61)$$

である。 f_0 は (1.5)。

クラス U に属するグラフの特徴は各頂点は三本の線から成りそれらの線は交叉していないことである。

今 (61) の f_1, f_2 は既約としその最高次を

$$f_1(s, t) = s^{\alpha_1} \cdot t^{\beta_1} + \dots,$$

$$f_2(s, t) = s^{\alpha_2} \cdot t^{\beta_2} + \dots$$

とする。つまり f_i は s について α_i 次, t については β_i 次そして全次数が $\alpha_i + \beta_i$ ということ。この時 (61) の f は

$$f(s, t) = s^{\alpha} \cdot t^{\beta} + \dots,$$

$$\alpha = 2\alpha_1\beta_2 + 2\alpha_2\beta_1 + 2\beta_1\beta_2,$$

$$\beta = 2\beta_1\beta_2.$$

$$\left. \begin{array}{l} f(s, t) = s^{\alpha} \cdot t^{\beta} + \dots, \\ \alpha = 2\alpha_1\beta_2 + 2\alpha_2\beta_1 + 2\beta_1\beta_2, \\ \beta = 2\beta_1\beta_2. \end{array} \right\} \quad (62)$$

f が既約ならそのclass m は

$$m - 2\alpha = 2\beta_1(m_2 - 2\alpha_2) + 2\beta_2(m_1 - 2\alpha_1),$$

m_1 は $f_1=0$ のclass,

m_2 は $f_2=0$ のclass.

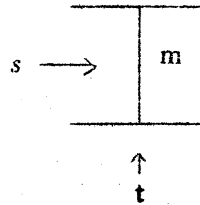
} (63)

一般には cusp がないから $f=0$ の genus は計算できる。ところがグラフがある対称性を
持てばその Landau 曲線は可約となる。

§7 クラスC

交叉したグラフのクラスCはLandau曲線を扱うには, $s+t+u=\sum_1^4(\text{外部質量})^2$ で
 u -変数を導入して適当に使い分けるのであるが, ここでは省略致します。

尚ここで取り扱われなかつたグラフに



がある。このLandau曲線は $t=m^2$ なる直線で, Kibble曲線の接線になつていないか
らグラフのつなぎ合せに使えないのである。

以上

文 献

- 1) N.Nakanishi, Prog. Theor. Phys. **22**(1959), 128.
" " " **23**(1960), 284.
" " " Supple. Prog. Theor. Phys. **18**(1961), 1.
- 2) L.D.Landau, Nucl. Phys. **13**(1959), 181.
- 3) J.D. Bjorken, Stanford preprint, (1959).
- 4) この節に出てくる式の証明は
D.B.Melrose, Nuovo Cimento XLA(1965), 182. の appendix
に載っている。

- 5) R.Karplus, C. M. Sommerfield and E.H.Wichmann ,
||, Phys, Rev. **144** (1959), 376.
- 6) J.Tarski , Journ.Math. Phys. **1** (1960), 149.
- 7) T.W.B. Kibble, Phys.Rev. **117** (1960), 1159.